

登校拒否に関する研究 (第V報)*

— 不登校生徒の合宿体験 —

池田博和 吉井健治¹⁾

I. はじめに

従来、キャンプ等を取り入れた集団精神療法の有効性を報告したレポートには、スラブソン (Slavson, S. R.), ローリー (Lowrey, L.) を先駆として、とくにアメリカの精神科医や心理学者によるものがいくつか見られる。最近では、問題行動の治療や矯正の効果に着目し、キャンプを導入した治療キャンプ (Therapeutic camp) やキャンプ療法 (Camping therapy) が独立した領域を形成しつつある (池田, 1975, 山口ほか, 1987)。

わが国においても、自閉症やアパシーの治療に関する同様の報告が見られる。また、福井県や香川県の児童相談所では、3日から5日の期間、さまざまな問題行動や不登校の子どもを対象とした治療キャンプを実施しており、キャンプ後の意向や適応状態の改善等、おおむね良好な経過を報告している。とくに不登校生徒を対象を絞った研究には黒田 (1973) の報告があり、そこでは、15週間の治療キャンプを実施して、治療的集団の発展過程を明らかにするとともに、その治療的有効性を実証している。こうした不登校生徒を対象としたキャンプの試み自体は最近、多くの地域の児童相談所その他の機関でかなり行われるようになってきてはいるが、その成果の報告や心理学的意味の検討は、われわれの知る限り、上記以外には見当たらない。

現在、不登校生徒の発生は依然としてうなぎ上りの状態にあり、将来的にもさらなる増加が予想される中で、登校拒否問題への対処に関しては幅広くさまざまな接近

の可能性が検討されねばならないことはいうまでもないが、とくにこうしたキャンプないしは合宿等による接近にはかなりの有効性があると考えられ、この分野での実践とその詳細な検討の開拓が待たれるところである。

また、登校拒否生徒の発生には、昨年発表された中教審中間報告にもある通り、成因論的には本人の性格や家庭環境の問題もさりながら、学校状況における誘因的事態の方がより重要であるといわれている。けれどもなお依然として、学校現場においては教師による不登校問題への対処に関して特別新たな探索的、試行錯誤的な接近の展開が見られるわけではない。とはいえ、この問題に関して、具体的には動き出せないまでも、内心何とかしなければと心を痛めたり、内なる熱意と関心をどう具現化すればよいのかわからず、手をこまねいている教師も決して少なくはないのであり、こうした不登校問題にかかわるもっとも重要な資源である教師に内在している熱意と関心に対して、どう具体的、現実的に水路づけをし、有効に組織化、行動化させることができるのかを検討することも、臨床心理学の立場での重要な役割のひとつであろう。

以上のような問題意識に立って、われわれは今回、不登校生徒を対象として、学校教師を働きかけ側の主体とする合宿を実施した。今後、同様の試みがなされるに当たって、今回の経験を言語化し纏めておくことには相当の意義があると考えられるので、以下その経過を現象学的に記述し、その心理学的意味の検討と考察を報告することにしたい。

この合宿の本来の企画自体は「不登校を考える親の会」の主催になるものであり、主要スタッフは「親の会」にかかわる教師が中心であった。この企画段階で、具体的に遂行するに当たって、われわれ2名の筆者が招かれた。われわれはスタッフとして参加する教師たちと一緒に、プラン、プログラムの作成から、合宿の意味、目的、スタッフの基本的な態度の取り方、対応の仕方についての打合せや勉強会等の準備、検討からはじめ、合宿の実施、再会ミーティングまで、すべての過程

* 本論の概要は東海心理学会第40回大会において、以下の共同研究として発表された。

池田博和, 中村和行, 大沢恒夫, 平林克友, 加藤達夫, 北浦茂, 吉井健治 1991 「不登校児童・生徒の合宿体験について」第I報～第VI報 東海心理学会第40回大会 (名古屋女子大学) 発表論文集48-53

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士後期課程

に参加してきたので、本報告においてはわれわれふたりの体験を中心に報告していくことにしたいと思う。

なお、本報告の概要は「東海心理学会第40回大会」（1991）において、註にあげた共同研究者とともに発表した。本論は共同発表者の了承を得て、臨床心理学の立場からわれわれふたりの責任において纏めたものである。

この場を借りて、今回このような機会をお与えいただいた「不登校を考える親の会」の関係者の方々、合宿に参加されたすべての方々、および東海心理学会での共同発表者の方々に心よりの感謝を申し上げたい。

II. 「合宿」の目的と基本的姿勢

われわれと教師スタッフは、今回の「ふれあい合宿」と名付けられた企画のプログラムとプランの作成に当たり、10数回に及ぶミーティングを重ね準備をすすめた。その中で、何のために「合宿」を実施するのかという問題意識をはじめ、「合宿」の基本的な意味やわれわれの参加の仕方について全員で協議し、相互理解を図ることとした。その概要は以下の通りである。

1. スタッフの位置づけ

まずスタッフの呼び名であるが、対象となるメンバーとできるだけ共通の地平に立つために、日頃呼びならわしている「先生」はやめる。スタッフといえども同じ参加者であり、不登校生徒と同じプログラムと一緒に参加する点ではグループ・メンバーでもあるけれども、合宿が目指す本来の目的、つまり行事の遂行、達成という外側の目的ではなく、後で検討するような心理的、内面的目的を心得ており、そこに向けて集団が機能していけるよう留意し、自己の行動を統制するという点で、エソカウンター・グループでいう「ファシリテーター」といういい方を主催者側内部では用いることにする。これに対応して、対象となる参加者はメンバーと呼ばれることになる。なお、ファシリテーターは合宿では「ヒゲさん」「クマさん」など自分が呼ばれたい愛称を名札に書き、全員がそれで呼ぶこととする。それはメンバーも同様である。

2. 教師にとっての合宿の意味

この合宿は本来、メンバーのためにその心理的成長を促そうとするものであることは勿論であるけれども、ファシリテーターとして参加するスタッフ自身の事柄として考えてみた結果、以下のような意味が明確化された。

① スタッフにとってこれが不登校児童・生徒の集団と直接的にかかわる初めての機会であり、新しい体験を得ることになる。従来、書物や研修会で獲得してきた知識を具体的実践を通して深めることができるので、

実際的な対応の仕方を学ぶことができ、それは教師としての成長にも繋がることになる。

② 今回の合宿を通してメンバーの理解に努め、不登校問題の本質の一端を認識することができれば、今後この問題の対処に関する接近の巾が広がることになる。

③ ファシリテーターとして、直接いかにしてメンバーの変容を促進できるかということがもっとも重要な体験となる。すなわち、これまでにほとんど登校拒否生徒に触れたことのないスタッフが、合宿の中でどれほど治療教育的な動きが取れるのかということ、また、それに応じてメンバーがどれほど動きうるのかということを確認することである。

3. 不登校生徒にとっての合宿の意義

以上の考えに基づき、「ふれあい合宿」で意図されているのは、集団生活でのかかわりと相互役割取得の体験を通して、子どもたちが自らを客観視し、その自主性と自立性にかかわる問題に対する自覚を高めることである。また、彼らの固定化した日常生活に刺激を与え、豊かな自然環境の中で同じ境遇の仲間と直接に触れ合うことにも重要な意味がある。すなわちそれは、決して自分だけが疎外された特殊な存在なのだというわけではないということ、同じ共通の人間なのだということ、を体験を通して実感しうる機会となるのである。このようないわゆる「共通感覚」(common sense, すなわち常識、良識)の体験を促すことにより、それを基盤として、できれば登校意欲が高揚することまでを図りたいと考えるものである。

4. 不登校生徒の心理的特性とその背景的要因

こうした合宿の目的を設定するに当たっては、基本的にまず不登校生徒の心理的特性とその背景的要因から検討しておく必要がある。ただしこれらの点については、専門的にはすでにいい尽くされている感もあるので、詳細は専門書に譲るとして、ここではごく重要と考えられる点に関してだけ簡単におさらいしておくことにしたい。今日見られる不登校問題はわが国にかなり独特のものである。子どもが学校へ行くことは、わが国ではごく当然なことと受け止められている。しかし不登校の子どもは、そのごく当然のことに挫折している。登校すべきなのにできないのである。ただし、それにはそれなりの理由があるわけである。したがって、その社会参加から退避せざるをえないというあり方の根本にある事柄を、家族を含め周囲の関係者がどう理解し受け止めるのか、そしてそこを踏まえてどうすれば本人の社会参加に向けての成熟を促せるのかという観点に立ってはじめて、その援助も可能となる。

一般に、不登校生徒はストレスフルな状況の中で、受

容欲求や愛情飢餓感、孤立感や疎外感、不平等感や無理解感等を感じ、その悲観的、否定的な現実的自己像と他方で希望的、肯定的な理想的自己像の間で揺れ動いているという心理的特徴がある。また、彼らは荒々しい現実への適応に関しては脆弱で、優しく傷つきやすいという反面、それゆえにまた頑固で硬直化した自己像にもしがみつかざるをえない。こうした心理的特性を形成してきた背景には、当然さまざまな要因が考えられるけれども、家族因的側面に関していえば、もっともよく指摘されているのは「母子密着」と「父親の心理的不在」という事態である。これは個々の具体的問題としては必ずしもそのように一般化しえない場合も多く、大いに誤解を招きやすいくり方ではあるけれども、しかしそれでもなお、徹底的に抽象化し捨象していくならば、やはりそう表現することが妥当であると思われる。

5. われわれの基本的な考え方

またわれわれ（池田ほか、1988）は、登校拒否の基本的事態を次のように考えている。つまり、子どもの行動の規範はもっぱら親や大人に準拠しており、その存在様式自体、「タテ関係」優位の構造にあるとされているが、他方、大人は同僚や配偶者や社会一般とのいわゆる「ヨコ関係」優位の構造としてある。このタテ関係からヨコ関係への質的転換を達成せねばならないのが青年期であり、その重要契機となるのは友人関係に他ならないが、まさしくこの青年期の精神発達課題において、挫折し退却せざるをえなくなっているのが登校拒否児なのである。ヨコ関係優位の構造へと展開するためには、この段階で「皆と同じである」（Auchsein）という、ヨコの意味方向を持ついわゆる「共通感覚」が、一層高次元で広範囲に獲得されねばならない。青年期は、この課題を達成することによって一段成熟しうることになる可能性の時であると同時に、またそれまでに獲得されてきた「共通感覚」の質が試される試練の時でもある。この課題を乗り越えるためには、その試練に耐えうるだけの「共通感覚」の基礎ができていなければならないのである。しかるに、登校拒否児がこの課題の前で挫折したということは、この「共通感覚」の基礎が十分形成されていなかったということに他ならない。とすれば、彼らへの援助としてなすべきことはすでに明らかであろう。すなわち、彼らの「共通感覚」の基礎を補強し、ヨコ関係の広がり地帯へと「歩みだすこと」を保障していくこと、そこにこそ治療的接近の中核がある、と考えられるわけである。

そのための具体的援助の方法として、合宿体験を試みてもみる意味はきわめて大きいのではないだろうか。

6. 合宿の治療的意味

こうした心理的特性、不登校の要因や基本的あり方を踏まえ、合宿のもつ治療的特性をまとめてみると、次のようになる。

① 家庭生活からの分離

彼らが現在、物理的にも心理的にも依存している家庭環境から一旦離すことにより、さしあたりひとりで自分自身の経験をするということ、いわば自立心への自覚を育てることに繋がりをものと考えられる。

② 仲間集団での生活

合宿は、集団という幾分不自由な生活の中で他の生徒たちやファシリテーターと、ともかく接しなければならぬことから、種々の個性を持つ他者を知り、相手に合わせて自分を出したり引いたりする社会的経験を積むとともに、人との関係における柔軟性を身につける恰好の機会となる。また、彼らが日常生活をとる中で、仲間に共感したり反発したり同一化したりすることによって、自分自身に気づき自己理解をはかる機会ともなりうる。

③ 直接的現実的体験

ヨコ関係という時のヨコの意味方向とは、比喩的にいえば、大地に立ち、歩むということである。これに対してタテの意味方向は、動詞で表現すれば、「上る」と「落ちる」である。彼らは往々その観念的世界の中で上ったり、落ちたりしているものであるが、大地に立脚して歩む経験は概して貧弱であり、実感としての大地への信頼が希薄である。この信頼を獲得するためには、ともかくまず自分の手と足で行動し歩みださねばならない。合宿はそうした現実的直接的経験を与えることになる。観念的、代理的経験なのではなくて、まさしく実際の現実的体験により、さらには集団の中でさまざまに起こってくる力動的関係、たとえば協力と役割分担、相互評価やモデリング、共闘や競争等々の経験を通して（それらには勿論、傷つくようなネガティブな影響の危険性もあるが、それはあとに述べるようなファシリテーターの努力で補う必要がある）、できれば彼らの肯定的自己像の構築や自信の回復を促すような機会とさせたい。

以上、合宿の目的についてまとめておくと、それは集団生活の中で遊びやゲームを通して、不登校生徒が自らの姿勢に気づき、自然の中で日頃不足しがちな直接的現実的体験を積み、仲間と「ともにある」人間関係を通して「共通感覚」の巾を広げうるような体験を積ませる、ということである。

7. 集団精神療法的視点

以上の治療論的目論見を実現させるためには、この合

宿にかかわるファシリテーターのあり方が重要なポイントとなる。そこでわれわれは合宿を実施するに当たってまず、集団精神療法の観点から合宿体験の意味について検討することとした。ヤロム (Yalom, I. D., 1975)は、集団精神療法の治癒的要因として12の要因をあげているが、これらのうち、今回の体験合宿において重要な要因と考えられるものを以下にあげた。

【受容】メンバーは絶対的に受容されることによって、集団に所属感を持つことができ、自分が支えられ、配慮され、以前には決して受け入れられなかったことでさえ、グループでは無条件に受け入れられ、自分がグループの中で価値のある存在として認められていると感ずることができるようになる。

【同一視】リーダーないし他のメンバーの肯定的な側面をモデルとすることによって、自分自身のあり方に関して新たな学びを得る。

【普遍性】問題の分かちあいによって、他の人も自分と同じような感情や問題を持っていることを理解する。人間の行動や苦悩あるいは努力には普遍性があり、自分だけのものではないことを納得する。これはわれわれが強調する「共通感覚」の体験に通ずることである。

【対人関係、自己表現】自分が他者にどのように見られるのか、自分の自己表現はどのように他者に伝わるのかを知り、人との関係の中にある自己に気づき、他者に対するよりの確な自分の出し方を考える。

これとは反対に、集団の展開を阻害する場合についても考えておく必要がある。ビオン (Bion, W. R., 1952)は、グループを阻害する相互作用のあり方について3つのパターンを述べている。すなわち彼は、集団の力動の中で起きてくる相互作用のあり方を基本的仮定 (basic assumption)と名づけ、依存性、闘争—逃避、対の3つをあげる。まず、依存性 (dependance)とは集団のメンバーが相互に、あるいは一定の権威者に依存することで、次の闘争—逃避 (fight and flight)はメンバーが相互に対立、抗争したり、あるいは逃避することで、最後に対 (paring)は集団のメンバーが互いに気に入った相手を選んでペアになって外れてしまうことで、集団全体としての機能が無効化するのである。

このように、体験合宿に集団精神療法的概念によりアプローチすることで、より有効な集団効果が期待されることになる。

8. ファシリテーターのかかわり方

われわれがファシリテーターとしてメンバーに接する場合、リーダーシップの取り方について述べたウォン (Wong, N)の考えがひとつの参考になる (秋山, 1986)。彼はふたつの異なったリーダーシップ型、すなわち「カ

リスマ的リーダーシップ型」と「反動的 (reflective)リーダーシップ型」について述べている。カリスマ的なリーダーは、力強さ、サポート、保護、絶対的な確信などの雰囲気メンバーに伝えるので、メンバーは高い期待を抱き、グループに献身的かつ忠実になる。またグループの相互作用はもっぱらリーダーを中心としており、メンバーはリーダーに依存を示すことになる。しかし、リーダーがその全能感のために、メンバーに対して侵襲的、挑戦的、権威的になると、グループの存続が危うくなることもある。一方、反動的なリーダーはグループの中で起きている相互作用に沿うようにするので、中心になることはない。グループはグループ自身を中心として動き、リーダーの指針によって定められた方向へ進むのではないから、グループ自体の展開とメンバーの成長を中核として進んでいく。ウォンはこのようなリーダーシップ型を二者択一的には考えず、グループの開始初期にはカリスマ型主導で、グループが展開するとともに反映型に移っていくことが望ましいと述べている。つまり、グループ開始初期にはある程度強力なリーダーシップを取ることににより、グループに一定の方向と形態と構造を与えて、メンバーにグループへの期待や忠誠心を引き出すよう働きかける必要があるが、グループ・プロセスがより進んだ段階では、メンバーの自律性や成長力を生かすため反動的リーダーシップに移行することが望ましいわけである。

9. ファシリテーターの基本的態度

一方、ロジャース (Rogers, C. R.)がセラピストの基本的態度として、純粋性 (genuineness)、無条件の肯定的関心 (unconditional positive regard)、共感 (empathy)の3つをあげていることはあまりにもよく知られている。そこで、われわれは以上の検討を踏まえて今回の体験合宿においては、ファシリテーターは次のような基本的態度を取ることにした。

- ① メンバーに対する基本姿勢は、メンバーの自発的な意欲を大切に、常にメンバーの気持を受け止め、徹底的な受容に努めることとする。
- ② プログラムの進度にしたがって、始めはファシリテーター主導による構造化された状況から、徐々にメンバー主導による自由度の高い状況へと変え、メンバーの相互作用を促進する。
- ③ メンバーの対象関係のあり方がファシリテーターや他のメンバーに反映されることを常に意識する。また、合宿中の実際の対人的相互作用がモデルとなって、各メンバーの行動に影響を与えるようにする。
- ④ 生活指導の面においては、起床、洗面、入浴、清掃等、生活習慣に関することには極力干渉をせず、メン

原 著

	AM 7	8	9	10	11	12	PM 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11					
3月27日(水)			集 合	バス 移動	セン ター着	であ いの ひと とき	昼 食	オリ エン テー ション	であいのた めの軽運 動			部 屋割	休 息・ 移 動	夕 食	部 屋遊 び	入 浴	づ くり	日 記張	話 し合 い	日 記に 記入	就 寝準 備	就 寝
3月28日(木)		起 床・ 洗面	朝 食	自 由	出 発準 備	散 策 ゲーム	グ ル ー プ 対 抗 ゲーム	昼 食	夕 食づ くり			パ ー ティ ー外	野 浴	入 浴	話 し合 い	日 記に 記入	部 屋遊 び	就 寝準 備	就 寝			
3月29日(金)		起 床・ 洗面	朝 食	自 由	出 発準 備	ウ ォ ー ク ・ ラ リ ー						パ ー ティ ー外	野 浴	入 浴	話 し合 い	日 記に 記入	就 寝準 備	就 寝				
3月30日(土)		起 床・ 洗面	朝 食	自 由	片 付け	ま と め の 表 親 の 面 接	現 親 の 勉 強 会	発 表 会	昼 食	お わ か れ 会	解 散											

図1 「ふれあい合宿」プログラム

バーの拒否する意志をも尊重する。

- ⑤ 合宿中の行動観察として、メンバーが就寝した後、ファシリテーター全員にスタッフ・ミーティングを毎晩行い、その日のメンバーの行動と翌日の対応について協議する。

合宿中の観察と記録は、参加観察法、すなわちサリバソ(Sullivan, H. S.)のいう「関与しながらの観察」の仕方を探る。それは、ファシリテーターとメンバーとの関係自体を、その関係の中にありながら自分自身と他者、および関係そのものについて観察するものであり、メンバーをただ客観的に眺めて判断したり、診断したりするものとは異なり、ファシリテーターはともに一緒に経験しながら、自己とメンバーとの間にどのようなことが起きているかを把握するのである。われわれはこの方法をもとに毎晩のミーティングで各自が観察したことを報告しあい、メンバーの人格や行動の特徴を理解するとともに、メンバーが抱えている心理的課題に関する仮説をたてて翌日のメンバーへの対応の方針を決定していくことにした。

10. 合宿のプランについて

上記の目的を達成するためには、どのような行事がもっとも適切かを考え話し合った結果、図1の「ふれあい合宿」のプログラムが作成された。第1日目からの各プラ

ンは、ファシリテーターがこれまで学んできた態度により、メンバー個々の実態に即して柔軟に対応することで遂行される。そこでは、メンバーの身体の安全やグループの過程に著しく悪い影響を及ぼすと思われる行動以外、原則的には干渉や指示、規制を極力ひかえ、メンバーを受容すること、彼らの体験を共感的に理解することに努める。以下、4日間の主な取り組みについて、目的と実施方法を簡単に述べておきたい。

第1日目の「出会いのひととき」と「出会いのための軽運動」は、ゲームや軽い運動等を行うことによって、合宿体験に対する不安や未知の人に会おう恐れに対するメンバーの緊張や不安を軽減するとともに、ファシリテーターとメンバー相互の関係を暖かい、肯定的なものにすることが目指されている。「日記帳づくり」は、自発性と自己決定を重視した方向への第一歩として、日記づくりの方法や材料選択はメンバーに任せることとし、また合宿の毎日の振りかえりとしての意義を持たせる。

第2日目は、メンバーがグループの一員として認識し動けるようになること、グループを作り、他者を受け入れ、対人関係を広げる体験がねらいである。まず「散策」はグループになって2kmのコースをのんびり歩き、自然に触れる中で心理的かつ身体的な緊張をほぐしながら、仲間づくりをする。ついで午前中の「グループ対抗

ゲーム」では、自分のグループだけでなく、他のグループやファシリテーターとともに動いていることを視野に入れる。午後の「夕食づくり・野外パーティー」では、話しあいをもとにグループで協力して、献立、買い出し、調理、会食に取り組む。互いに協力し役割分担し助け合うことでグループの凝集性を高めることにしたい。

第3日目は、グループの再編成の体験とともに、メンバーで協力して問題を解決する体験をする。「ウォーク・ラリー」は野外、山中を用いてグループが相談して「コマ図」（全体的な鳥観的地図なしに重要な岐路のみを取り出した図）を頼りに、他のグループと競いながらいくつか設定されたポイントを通りゴールを目指して歩く競技であり、とくに午後の課題はかなり難しいものである。ここではグループ内での話し合いや関係、その過程が重視されるが、ファシリテーターは各ポイントや迷い込みやすい地点に立つため、グループ内関係の全貌を観察しうるわけではない。このゲームはメンバーに多少ストレスがかかることになるが、ファシリテーターはできるだけ手や口を出さないと見守ることとする。ゴールしてくるメンバーを暖かく迎え、雰囲気盛りあげをはかるため、他のファシリテーターや親たちは食事の用意をしておき、そのまま「野外パーティー」に移る。そこではウォーク・ラリーの結果を話題に、励まし健闘をたたえる。

第4日目は、合宿の全日程を振りかえり、ここで得た体験や感情の動きを皆で一緒に確かめ合い、明確化し定着させる体験を図りたい。「まとめの表現」は、グループごとに振りかえり話し合っ、1枚の紙に「まとめ」を自由な形で表現する。そして、これは迎えにきた親たちの前で発表されることになる。

Ⅲ. 結果

合宿は、平成3年3月27日（水）から30日（土）までの3泊4日、愛知県額田郡の「愛知県野外教育センター」において行われた。4日間とも雨模様のぐずついた天候

であったため、プログラムにも多少の影響があった。

今回の合宿に参加したメンバーは、表1に示したように、小学生を含めて合計7名であった。名前は合宿で実際に用いられた愛称とは別にここでつけた仮名である。

はじめ親の会での感触等からすれば、参加者には男女含め最大30名ほどが見込まれ、6、7名を1グループにすれば4、5グループができ、全体としては準クラスの集団になる予定であったが、結果的には7名しか集まらなかった。この参加者募集の側面にわれわれ筆者2名は直接にかかわっていないので、この面で今後検討せねばならない問題点が多いが、ここでは立ち入らないことにしたい。はじめに予定された事前の親面接も、合宿の直前まで出欠がはっきりしなかったため行うことができなかった。このためわれわれファシリテーターのほとんどは、つまり親の会で接触した特定の教師以外はすべて、参加者とはまったく初対面であり、彼らの背景については完全に何も知らない状態であった。

また、はじめには子どもグループとは独立に並行して「親グループ」を行うことも予定されていたが、これもほとんどの親の都合がつかず、実施はできなかった。

こうして予測に反して、参加者がなかなか決まらなかった点はあるけれども、7名の参加者に対して倍以上のファシリテーターで臨んだ合宿は、それなりに大変興味深い意味あるものとなった。一般の集団療法的構造とは異なるが、不登校の小・中学生集団の場合にはむしろこのような構造こそ望ましいもののように思われる。「船頭多くして……」のことわざとは正反対に、心をひとつにして大勢で臨めば、重い石も動かせるとでもいう効用である。この具体的な内容については、以下順を追って検討していくことにしたい。

ファシリテーターは、それぞれの所属が大学教官、大学院生、高校教師、中学教師、小学教師、ボランティアの高校生等からなり、10代から50代の男性12名、女性4名という構成であった。その構造は、非常に大雑把に図式化してみれば、図2のような4相同心円としてイメー

表1 合宿の参加メンバー

愛 称	性別	学 年	参加の動機	備 考
スタイル	男	中学2年生	親のすすめで	
ツバサ	男	中学2年生	親のすすめで	
ファイヤー	男	中学2年生	自発的参加	
キャップ	男	中学2年生	こずかいを与えるといわれて	
タズラ	男	小学5年生	親のすすめで	非不登校 ツバサの弟
チャー	男	小学5年生	親のすすめで	非不登校 ラッコの兄
ラッコ	男	小学2年生	親のすすめで	

ジ・アップしうる。すなわち、一番内部の円をメンバーとすれば、それに接する2番目の円は10代から20代のファシリテーター約8名で、彼らは心理的、客観的にもっともメンバーに近く、ほとんどいつも一緒に遊んだり行動をともにしていた。次の相は30代の教師、約5名で、2番目の相よりはやや離れて、プログラムの推進、会計、渉外など実務的な役割を担い、40代、50代の3名はメンバーからはもっとも遠く、一番外側の円に属し、統括とスーパーヴァイザー的役割を受け持った。上の記述で「約〇名」としたのは、このような役割が必ずしも固定的ではなく、時と場合でかなり流動的であったこと、ファシリテーターの勤務上の都合により一時的に合宿に出入りせざるをえない事情があって、やむをえずオープン・システムにせねばならなかったこと、対外的な関係で来客や取材、応援、差し入れのための参加者があったこと等の理由によっている。なお、ファシリテーターの参加はすべて、自費により休暇を取って行われたものである。

以下、日程順に結果の概要を記すが、ここでは4名の中学2年生の動きを中心に述べていくことにしたい。

1. 第1日目

センター到着の時間がそろわず、「出会いのひととき」は実施できなかったため、そのあとの「であいのための軽運動」で全員が顔を合わせるようになった。これは、計画では野外（駐車場）が予定されていたが、雨のため体育館で行われた。第1日目の行事担当のファシリテーターは、自然な形でメンバーをリラックスさせるために、倉庫からバスケット・ボールを出しておいたところ、メンバーは予想以上に自発的にボール遊びを始め、われわれを驚かせた。次第にお互いの緊張も解けて、ファシリテーターが話しかけると少しずつ応答し、表情も緩

んできた。偶然の配慮で、自然な形で皆が対面できたように感じられた。

このあとは、自分の愛称を考えカードに記入し、それを持っての自己紹介、「あいさつジャンケン」「名前当てゲーム」「落ちた落ちた」「しっぽとり」等のゲームから始め、次に相手の身体に触れることにより親密感を覚える効果をねらったものとして「ムカデゲーム」「キャッチゲーム」「ひざたたき」を行い、それから仲間づくりのために「数当てゲーム」「この指とまれ」「ブラインド・ウォーク」を実施した。夕食、入浴もメンバーと一緒にし、ファシリテーターは可能な限りメンバーを快く受け入れるよう心掛けた。

スタイルは、紫のシャツに流行風の黒ズボンというおしゃれな服装で、金のネックレスをつけていて、年齢より大人びて見える。表情は固く近寄りたがたい印象をうけるが、人が話しかけるとすぐに、にやにやした表情になり小さな声で応えてくれる。ファッションで飾りたてた細身の姿からは弱々しさが感じられるが、バスケットボールでドリブルしているときは力強く、大胆な一面が見られる。このように外見のスマートさと行動面の激しさというふたつの側面が、ひどく両極端のものとして映ってくる。集団とのかかわりの面では、バスケットと一緒にやろうと誘えばすぐののってくるし、色々なゲームにも積極的に参加してくる。他のメンバーからパスをもらおうと、そのままひとりでドリブルしてシュートするようなスタンド・プレー的な行動が見られ、仲間と協力しようとする気持はあまりないように思われた。ゲームが終わると、再びもとのややうつむきかげんの表情の乏しい姿に変わる。ゲーム中もゲームを楽しんでいるという風ではなく、仕様がなからやっているだけという感じで、自分から他者へかかわりを求めていこうという気持は薄いように見えた。少しの自由な時間ができる、皆がいる場所からふらっとひとり離れ、バスケット・ボールでドリブルしていることが多い。集団を拒否したり避けたりはしないが、自発的に意欲的に参加するということでもない。ただ外面的に集団に同調しているだけのようなのである。あるファシリテーターは「彼が集団の中でゲームをしている時の表情とそれ以外のひとりである時の表情が極端に違う、また人が話しかけないとすぐに自分の殻にこもる、感情を抑えているという印象を持った」と述べている。ここでも、集団に同調して見せる顔とひとりの世界にいる時の顔がひどく異なることが示されている。スタイルが時々サングラスをかけることがあるのも、集団への同調が難しくなったとき、いいかえれば自己の世界の殻を守ることが難しくなった時なのだろう。夜の「日記帳づくり」では、各自が自由に素材を組み合

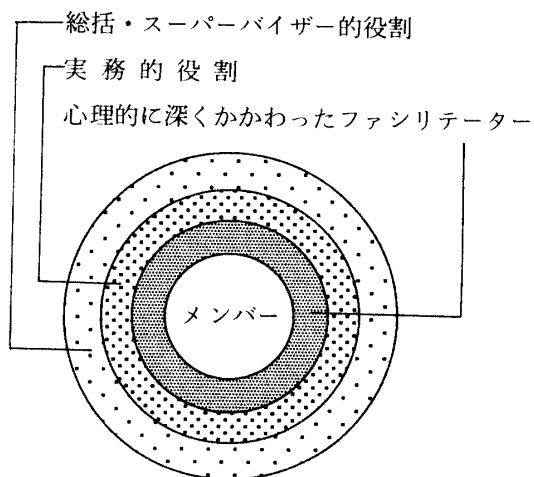


図2 ファシリテーターの構成

わせて自分の日記帳を作るのだが、スタイルはその表紙に「Kill you」と書いている。第1日目を過ごした中で、攻撃性や自己主張を出しても大丈夫という確認がなされたのだろうか。この点が彼にとってのひとつの主題となる。

ツバサは、ボソボソとした小さい声で、ニヤッとした表情である。小学生の弟のタズラとふたりで行動をともにすることがほとんどで、弟を気遣うような様子を見せている。バスケットのゴールのネットが結んであってボールが落ちてこないの、そこにボールを投げて積み上げる遊びを続けている。元サッカー部キャプテンなのに、全身を使うような動きはみられず、エネルギーの乏しさが感じられる。終始大人しい静かな態度で、表情も変わらず、ぼそっと立ちつくしていることが多い。集団の中では目立たない存在である。ゲーム中は他のメンバーと協力して動いていたが、自分から相手に声をかけることはほとんどない。ファシリテーターが働きかけると、はにかみながら多少の応答をするくらいであった。

ファイヤーは、身長が高くスマートな体格で、よく櫛のとおったサラサラした長髪で黒縁の眼鏡をしている。大きな声で自発的によく話したり笑ったりし、集団の中でも物怖じせず、明るい雰囲気を持っている。人の話しかけに色々応えたり、冗談をいったり、表面的な軽いのりで外向的にふるまっている。ファシリテーターがちょっと話しかけると、その何倍もの言葉が返ってくる。また、水道水を飲んでいる人を見ると、幼稚園児が水道水を飲んで病死した最近の事件のことを話したり、食事に出たヨーグルトを自分は食べないで、どんな味なのかをしきりに気にして尋ねてくるということがあり、神経質な面もうかがわせる。ゲームには、楽しんで参加している様子が見られる。スタイルに自分から話しかけることがよく見られた。大勢のなかで「済みませーん。鉄を取って下さーい」などと大きな声で頼む。同部屋のメンバー3人と話をしていて、ファイヤーがもっぱらリードをとっていた。ファイヤーの方からスタイルに話しかけて、ふたりはかなり接近した様子であった。

キャップは、服装や態度がだらしない感じで、幼稚な印象を受ける。体格は肥りぎみで、鈍重な様子。「しまったな。だまされた。それでこんなところに来てしまった。早く帰りたい」などといい、人の会話にもよく大きな声で茶々を入れる。ファイヤーやスタイルとはちがう意味で目立つ。どんな場面でもずっと野球帽をかぶっている。丸刈りの髪が気になるのか、それとも「移行対象」の意味を持つのであろうか。体育館では、最初皆の輪の中に入ることができず、ひとりである時間が長かった。誘われても拒否する。ゲームの中でロープを上まで登れた

時、知り合いのファシリテーター・Kがそれを褒めたことをきっかけに、Kに身体をくっつけ甘えた行動を示すようになる。Kに向かって、「もし～だったら、いくらくれる?」「もし～したら、～をおごってくれる?」というように、お金や褒美のことをよくいい、ゲームでミスをした者にはさかんに罰ゲームを要求する。このような褒美や罰という考えが行動原理になっていることは他の場面でも見られた。皆が話している時にはよく冗談やふざけでまぜっ返すが、いざ自分が自己紹介をする段になると、Kのうしろに隠れてもじもじしているばかりで、話せなくなってしまふ。ブラインド・ウォークではKとペアを組むことを要求したが、メンバー同士で組むことが告げられると不満そうな様子であった。目隠しをしたツバサをスタート時に激しくクルクルと回転させてふざけたり、手を引くのも、荒っぽいリードで配慮は少ない、わざと回り道をしたり水たまりの中に引きこんだり意地悪をする。次に交替して自分がリードされる番になると、「しまった、もっと優しくしとけばよかった」と冗談のようにいう。部屋では、小学生のタズラが持ってきたゲーム・ボーイと一緒に遊ぶようになり、ツバサもその仲間に入ってきた。

第1日目における集団内の関係をみると、キャップとKとのペア、兄弟のツバサとタズラのペア、スタイルとファイヤーのペアであった。しかし、夜にはトランプをしたり、全員で歯を磨きに行ったりして、全体としての行動も見られた。

2. 第2日目

朝の「散策」は、この日も小雨であったので、行くか行かないかは本人の自由に任された。出かけたのは中2の4人、残ったのは小学生3人。中2の4人はお互いを意識して出かけた様子があり、とくにキャップははじめ渋っていたが、他の3人に引張られる感じで出かけていった。ファシリテーターも二手に別れ、両方につきあった。散策中は全員で話をするというより、傘をさしていたため、2、3人で話す感じであった。中でもツバサはファシリテーターとの話の中で、自分はサッカーが好きだけど、部活で先生との関係がこじれたために学校へ行けなくなったなど、自分自身のことを話しはじめた。残った小学生たちはファシリテーターと一緒にゲームを楽しんでいた。

午前10時からはグループ内での交流を深めるための「グループ対抗ゲーム」として、メンバーを兄弟は別になるようにしてふたつのグループに分け、それぞれにファシリテーター3名が加わって、「地図作り」を行った。これはひとつの条件（たとえば「1本目の四つ角の北に銀行があります」といった簡単な指示）が書かれたカー

ド2枚を各自が持ち、これを見せ合わないで、会話だけで交流して全体の地図を作成するというゲームである。

これを説明している段階からすでに、ファイヤーはやる気がない様子である。同じグループのスタイルも同じような感じ。このグループ分けは前夜のファシリテーターのミーティングで予定したものであったが、果たしてこれでよかったのか。しかし、スタイルはすぐに積極的な姿勢を示し、鉛筆を持って地図を描き始める。ファイヤーは依然として全然のってこない。彼は座っている席もテーブルの端なので、余計はみ出した感じがある。

もう一方のグループでは、キャップがよく口は出しているが、あまり建設的な意見ではなく、椅子に反り返ったままで自分からは全然やろうとはしない。ツバサが小学生の話聞きながら静かに書いていく。両グループともファシリテーターはメンバーの様子を見ながら、時々控えめにちよつと示唆をしたりしている。ファイヤーはやはりグループの動きに入ることができない。ファシリテーター・Yが下敷きに使っていた新聞紙にある家や自動車その他の写真を切り抜いて、制作中の地図に貼ることを勧めると、ファイヤーはそれには興味を示し、熱心に切り抜きはじめた。スタイルはほとんど無言で一生懸命取り組み、最後まで書き続けた。ただ、他のメンバーとの交流がなされてないので、グループとしての纏まりはない。とくにキャップのグループでは、ファシリテーターの働きかけが難しく、結局それぞれが思い思いにすすめていったという感じであった。両グループで同じ地図ができあがるはずであったが、結果はまったく違ったものになった。グループで結束して、他のグループと競争するというまでにはとてもいかなかったが、スタイルが見せた姿勢、またツバサが地図を完成した後の発表会で自らすすんでグループを代表して説明したことなどは成果であった。そこで午後の夕食作りも同じグループ編成で臨むことになった。

この食事作りは、事前の検討にも多くの時間を費やして計画が立てられた。この2日目のメイン・イベントは、献立から買い出しを含め、一からすべてをメンバーにやらせることが基本的に重要であった。ファシリテーターは、ナタの使用などの危険なこと以外、最後までメンバーの考えや行動を尊重して、時間がかかったとしても手を出さないようにして見守っていかうと考えていた。

グループ分けは午前中の両グループに、それぞれ3、4人のファシリテーターが加わったが、これはメンバーの希望で選ばせることにした。両グループともやはり女性と若い男性ファシリテーターが選ばれた。残りのファシリテーターも1グループを編成した。

スタイルとファイヤーは同じグループでお互いに意識し合う仲、このグループは彼らが引っ張っている。どちらかといえばスタイルがリードし、ファイヤーは消極的。昨日はよくサングラスをかけていたスタイルが、サングラスを外し真剣にメニューを考えメモしている。

もう一方のグループでは、午前中発表したツバサがメニューを書いている。彼もかなりのってきている様子。

車に分乗してスーパーへ買い物に出かけたが、ここではふたつの出来事が目を引いた。ひとつは、材料費は各グループ3000円以内と決められていたので、ツバサは金額がはみ出ないように懸命に暗算で計算しながら皆で買物をしていたところ、一緒についていていたチーターの母親がチーターに電卓を渡し、チーターがそれで計算しはじめたため、ツバサの努力は水泡に帰して、元気がなくなってしまったのだった。この母親はチーターの弟ラッコがまだ小学2年生で心配であり、ラッコ本人も母親の同伴を望んだため、グループにはやや離れて参加していたのだったが、このような母親の影響は予想外のことであった。実際、このあとの野外炊事場での調理に当たっても、彼女は有能な主婦的機能を発揮しようとしたが、それはわれわれファシリテーターが望むものではなかった。

もうひとつは、スタイルの動きであった。イカは二本入りのパックになっていたが、彼は一本しかいらないので一本別売りにしてほしいと交渉し、渋っていた店員を口説いて、とうとうその通りにさせてしまった。また、彼のグループはレジで集計し終わったところで、3000円を少し超えてしまったが、この時彼は咄嗟に肉のパックを安いものに取り替えてきて、計算し直させたのだった。

買い物から帰って、いよいよ料理のはじまり。まずはじめは火おこしから。炉はコンクリート製で容易に火が燃せるようにはなっているが、連日雨模様で燃料も炉も湿っていて、慣れていないとなかなかの難関である。スタイルのグループではファイヤーが火の係をかって出て何とか火を着けようとしている。ツバサのグループではもうすでに火を燃やしだしている。チーターがボーイ・スカウトでの経験があり、コツを知っていたらしい。ご飯と焼き肉がメニュー。キャップは調理には関心を示さない。女性ファシリテーターのMが何度も働きかけるが「嫌だ、嫌だ」といって逃げてしまう。ところが、「うまいもの」にこだわるキャップはたまたまモヤシを見ると、「モヤシは頭と尻尾を取るとうまいんだって、前テレビでやってた」といった。側にいたファシリテーター・Nが「へえ、そうか、じゃあキャップ取ってみる?」と応えると、「ひとりやるの?ひとりじゃ嫌だ」

という。「それじゃあ、一緒にやろうか」ということで、Nとキャップはモヤシー一本一本の芽と根を取り除く作業と一緒にやることになる。キャップは「こだわりの世界だ、これだけやってうまくなかったら、これから料理番組は信用せんからな」などといいながら、ふたりでしゃがみこんで作業は延々と続けられた。1時間半たってもまだ半分ほどしかできてなかったが、Nは根と芽がついているものについていないものの味を比較してみようかと提案。はじめは全部取るんだといていたキャップも、疲れたせいか納得して同意した。しかし、キャップはかなり満足したようで、このあと随分素直な姿勢を見せるようになった。ちょっとしたことで「ご免なさい」と謝ったり（こんなことははじめてだった）、鍋や調理道具を他グループに借りに行くのに何度も足を運んだりした。いつもは不平や不満やふざけや逃げばかりで、決して身体を動かそうとしなかった彼が、自分から周囲にかかわろうとしたのだった。

もうひとつのグループでは、まだ火がついていなかった。ファイヤーが小さく破った紙を入れ、火をつけるが、紙が燃えるだけで一向に薪には火がつかない。若いファシリテーター・Aは「自分で色々やってみよう」といったまま、腕を組んでじっと見ているばかり。ファイヤーはほとんど無表情で同じことを繰り返している。通りかかる他のグループのメンバーやファシリテーターが励ましたり示唆する言葉をかけるが、ファイヤーは無言のまま、同じ動作なので、次第に沈黙がちになる。ファイヤーは完全に固くなってしまっている。じっと見ているAの内心の葛藤は極度に達していた。ファイヤーの気持はどんなであろうか。誰も教えてくれないという孤立感、ヤケ？うつむいて同じ動作をしているその目は心なしか潤んでいるようにも見える。通りがかりの者も立ち去り難くなり、だんだん見物人が増えていくが、誰もが燃やし方を教えてやりたい、手を出したいが、できないという異様な緊張、葛藤、イラだちに巻き込まれてしまう。そこにやってきたスーパーヴァイザーの「もっと新聞紙をたくさん入れなきゃだめだよ」の声をきっかけにして、いろいろ試みた結果、ようやく火がついて薪が大きく燃え上がった。はじめてから30分がたった。見守っていた周りの人たちの間から拍手がわき起こった。ファイヤーの目からは静かに涙がこぼれていた。涙のまま、彼は火をじっと見つめている。感動的ではある。テレビニュースのカメラもこの動きをずっと追っている。

火がついてからは、スタイルの出番であった。鉄板が用意されているはずであったのに、それがなかったため、彼は炉の中に入り込んで鍋で一生懸命、火と煙と灰

まみれになって焼きそばとお好み焼きを作ったのだった。これはかなり疲れたようで、焼き上がると彼は地面の上に大の字になってしまっていた。

料理ができてからは、両グループともでき上がったものをお互いに交換しあったりしながら、楽しく賞味し、長かった午後のプログラムも無事終わりとなった。

しかし、ファイヤーが見せた涙の意味は一体、何だったのだろうか。夜のミーティングで一番議論になったのはこの点であった。たしかにファシリテーターはできるだけ手を出さず、メンバーの主体性を尊重しようと打ち合わせてはいた。しかし、あの場面はあまりにも不自然ではなかったか。見守ることは大切だが、本質的には別のことが起こっていたのではないか。つまり、単に見つめられ評価されるということが。Aの葛藤もそこそこあった。もっと自然な形で、たとえばファシリテーターが隣でさりげなく火をおこしてモデルを示すとか、一緒に失敗しながら、じゃあ、どこをどうしたらいいだろうとともに試みしてみるような動きになる必要があった。勿論、ファイヤーが自分ひとりで努力し成功したという達成感を感じていたことも事実ではある。しかし他方で、そこまで追い込まれ孤立無援で見せ物にされ試されたというストレスにみちた体験でもあったであろう。

あるファシリテーターは夜の日記書きの時間の前に、ファイヤーはきっとあの火おこしの感動的な体験を書くだろうといったが、スーパーヴァイザーは、いや、とても書けないに違いないと応えた。実際、ファイヤーはその体験を書くことはできなかった。日記帳を広げたまま、いつまでも鉛筆を弄んでいるだけで、まったく何も書けない様子である。ただ一言「イラつく」という。やはりファイヤーにとっては、容易に言語化できるほど単純なものではない体験であったのだろう。

スタイルは、日記には英語で「Today was important, interesting」という感想を書いている。彼についてのファシリテーターの一致した印象は「自発的によく動ける子、格好はつけているがなりふり構わず熱中することもできる、独自の世界を持って、地図作りにしても食事作りにしてもひとりでどんどんやっていく、知的には高い」というものである。他方、自己愛的というか、他者には距離をとり、心理的交流をさける。自分ひとりでどんどんやり、他との交流がなされないのが、他のメンバーはついていけない。彼が自分のペースでやってしまうため、スタイルが入るとむしろ集団はばらばらになってしまう。

3. 第3日目

この日は午前、午後を通して合宿のメイン・プログラムであるウォーク・ラリーが実施された。これはすでに

述べたように、ふたり一組のグループが相談しながら、与えられたコマ図を頼りに山中の道を探して歩き、4つのチェック・ポイントを通過して、設定された標準時間にどれだけ近いタイムでゴールに到達できるかというゲームである。この日も小雨が降ったりやんだりのあいにくの天気であった。

まず、前日のグループ構成とは違えて、グループが再編成された。ヨコ関係の体験のために同年代のメンバーがペアになるよう、また、むしろあまり合わなさそうな相手と組ませることである程度緊張を与え、そこでの問題を協力して処理する体験が積めるようなグループにするという案が前夜のファシリテーターのミーティングで決められていた。第1グループは、お互いに大人しく依存性の高いペア、ツバサとファイヤー。第2グループは、常に独自の世界で行動を取りがちなペア、スタイルとキャップ。第3グループは、いつも従属的で率先して行動することのない小学生のペア、タズラとチーター。もうひとりのラッコは低年齢のため、スーパーヴァイザーとペアになって遊びながら歩くことにした。

出発前の室内で、ファシリテーターはこのゲームの説明をした上で、各ペアがコマ図に書かれた記号の読み取り方を相談する打合せの時間を設定し、各ペアに話し合わせさせた。第1グループは、よく接近して話し合いもすすんでいた、第2グループと第3グループは、ひとりがコマ図の読み取りを始めたのだが、一方は話に参加せず寝そべってしまうなどの逸脱傾向を示した。ファシリテーターは一切指示を出さないでいたところ、第2グループのキャップはゲーム機を取り出し、第3グループのタズラと一緒に勝手に遊びだすという行動を取りはじめた。これは、午後の話し合いの時間にも見られたが、ファイヤーはキャップに批判的でゲーム・ボーイの効果音に対して「情ない音立てるなよ」と軽くいなしていた。

このあと、全員キャンプ場に移動し、時間差を設けて順次各ペアはスタートしていった。話し合いが十分できていた第1グループは、コマ図の読み取りもうまくいったようで、途中少し迷いながらも、順調にゴールした。行動中もよく相談しながら協力ができたようであった。しかし、第2グループと第3グループは、同じ地点で迷い込んでばったり遭遇したのだったが、一緒になった4人はここで、コマ図を持ったリーダー的な者同士と、やる気なしで話し合いにも参加せずゲーム・ボーイで遊んでいた者同士の組に入れ替わってしまった。つまり、スタイルとチーター、キャップとタズラのペアに別れて歩きだしたのだった。キャップのペアには案内図がないのだから、ただやみくもに歩きまわるしかない。それに気づいたチェック・ポイントのファシリテーターから、元の

ペアに戻るように指示が与えられたため、一旦は戻ったものの、すぐにまた元通りになり、その後も結局、最後までグループは解体したままであった。

昼食後の第2回目のラリーは、午前よりもかなり難しいコースが設定されていた。まず、第1チェック・ポイントまで歩くのに約20分の時間を要し、その間はそれが正規のコースであるかどうかの不安を呼びおこすに十分であったし、全般に複雑なコースになっていた。ただし、後半は午前のコースと重複する部分も多く、学習効果により大きな達成感が味わえるように考慮されていた。午後の結果は、次の通りであった。

午前中は解体した第3グループの小学生ペアは、あとからわかったところでは、はじめからコースを外れ、最大のストレスのかかる箇所を通過せず、第1ポイントに到達し、その後も比較的順調にポイントを通過して短時間のうちに早々とゴールに到着し、満足そうであった。途中、コマ図を持つ役割をお互いに替わったり、よく相談をしながら行動することが多かった。

第2グループは、第1チェック・ポイントまでの正規のコースを4回試みたものの、ストレスが強すぎたため直前で4回とも引き返してしまった。スタイルは再度挑戦しようとしたが、キャップが「もういやだ、やめよう、帰ろう」と主張したため、仕方なく棄権することになった。キャップは本気になって、スタイルの世界、ペースを壊したのだった。しかし、スタイルは決して他者に攻撃性は向けないで自己委譲する。彼はゴールの本部に戻った時、出発時にはしていなかったサングラスをかけていた。そして彼は今度はひとりでいなくなった。急ぎ足でもう一度コースを確かめてきたのだった。

第1グループのファイヤーは最初から「よーし！」とやる気満々であった。ところが、彼のペアもコースを大きく外れて迷い込み、第1ポイントを通過することなく第2ポイントに到着してしまった。予定の時間より大幅に遅れていたため、本部からトランシーバーで第2ポイントのファシリテーターを通して、戻ってやり直すのではなく、そのまま次に進むよう指示が与えられたが、彼らは「とにかく規定通りちゃんとゴールしたいから、やり直させてほしい」と強く自己主張した。こんなこともこの合宿ではじめてのことであった。こうして彼らが相当遅くなって、ゴールに達した時にはすでに夕闇の帳も下りようとしていた。すべてのファシリテーターとメンバーが明々と燃やしたキャンプ・ファイヤーと熱いぜんざいで彼らを盛大に迎えたことはいうまでもない。

しかし、このウォーク・ラリーは全般的に言えば、様々な事情もあってファシリテーター側がはじめに意図した目的、すなわちグループ間、内での力動的相互作用

を通して、一緒に困難を乗り越え、成功体験、達成感を味わう中で、肯定的な自己確認をする機会とさせたいという目標に関しては、必ずしも十分実現できたとはいえない。とはいえ、実際的にはまあこんなものだろうという印象も強い。このあとでスタイルはテレビ局のインタヴューに応じて「学校は規則の中に少しの自由があるが、この合宿は自由の中に少しの規則がある」と語った。これを聞いたわれわれはうまいこというなあと思わず唸ったものだったが、ある高校教師のファシリテーターは「これは学校現場では権威的、カリスマ的になりがちなわれわれ教師への警告であり、学校といえどもこの合宿のように信じて受容し待つこと、生徒にとっての自由がもっと必要なことが身にしみてわかった」と語った。さらにツバサは「この合宿はもう一日あってもいいね。今日は寝ないでおこう」といい、ファイヤーに色々話しかけている。こうした点から見ても、今日の試みもそれなりに意味はあったと、大半のファシリテーターはほとんど一日中、小雨の山中に寒さに震えながら孤独に立ちつくすという大変な思いをしたのではあったが、あらためて報いられる気がしたのであった。

4. 第4日目

この最終日は、合宿生活をふりかえり、ひとりひとりが体験したことを思い返し、それを何らかの形で表現し、お互いにその体験を分かち合うことが狙いとされていた。まとめの表現とその発表会、そしてお別れの会というプログラムである。

この日の朝、起床時間の6時半には、昨夜も遅くまでトランプをして連日の疲れが溜っているのか誰も起きてはこなかった。7時半になって、ようやくスタイルとファイヤーとツバサは起きてきたが、他の子どもたちはベッドの中で起き上がったたり、横になったり、グッタリとしていたが、ファシリテーターが話しかける中で起き上がり、洗面と朝食に向かっていった。しかし、ひとりだけキャップはベッドから起きようとはせず、「朝食はまずいから、行かない」という。Aが食べないのかと聞くと「今朝のおかずは何？ 味見をしてきて」というので、Aが朝食を済ましてメニューを伝えると、キャップはようやく渋々腰を上げたのだった。

朝食の場でこのあと各部屋に別れて清掃をする予定が告げられると、スタイル、ファイヤー、ツバサの3人はすぐに部屋に戻って、持ち物整理、部屋の掃除、シーツの片付けをはじめ、清掃開始予定時刻にはすでにやるべきことを終えていた。キャップ以外は各部屋のメンバーは自発的に協力して作業を進めていた。キャップはふたつの部屋にまたがって寝泊まりしたので、ふたつのベッドを片付けねばならなかったが、Aに応援を求め

てシーツを畳みはじめると、スタイルは彼の手伝いをしだした。ファイヤーははじめは口でアドバイスしていたが、キャップがぐずぐずしているので、手を出して手伝いはじめた。キャップは掃除もしないので、結局、スタイルとファイヤーがキャップの部屋の清掃をしたのだった。

このあとメンバーは一室に集まり、「まとめの表現」を行った。これはともに過ごした4日間を振りかえり、皆で一枚の用紙に絵や字で思い出に残る印象深い体験を表現しようとするものであった。Aが昨日までの行事を順に思い出して語り、皆が一番楽しかったことは何だったかな、それをここに自由に描いてみよう、そしてこれをあとで迎えに来た保護者とファシリテーター全員の前で発表することにしようと呼びかけると、これを受けてスタイルとファイヤーは何を描こうかとメンバーに意見をきき始めた。スタイルは皆に向かって「この合宿で一番思い出に残ったことを書くことにしよう」という。他のメンバーは部屋の壁にもたれかかり、下を向いて沈黙したままである。なおもスタイルはひとりひとりに何がよいと聞くが、何も答えはかえってこない。何度も問いかけると、キャップが「おおくぼんち」がいいとふざけていう。女性ファシリテーターが「それ何」と聞くと、反対から声を出して読ませて喜んでいる。タズラは下を向いたままで問いかけを拒んでいる。ピーターは「ウノ」がよいといい、ラッコは何もいわずじっとしている。AとTが何がよいかも少し話し合ってみようと促す。スタイルはもう一度座っている順番に意見を求める。だが、キャップとタズラは下敷きの新聞紙のテレビ欄を見て、どの番組が面白いといった話をしだした。ツバサとチーターは下を向いたまま、成り行きを見守っている。話し合いはほとんど進まず、時間だけが予定を大幅に過ぎていく。ファシリテーターは焦っていた。キャップは「何やっとの。もうやりたくない」といい、タズラを連れて部屋を出ようとする。ファシリテーターが留めようと声をかけるが、ふたりは出ていってしまう。まもなくして彼らは帰ってきたが、その後もキャップは舌で色々な音を出して遊んだり、上目遣いにファシリテーターの顔を伺ったりしている。スタイルは何を描くかについて多数決で決めることを提案し、紙を回して各自に記入してもらおう。しかし結局、全体としてまとまった案は得られなかったの、それぞれの書きたいものを別々に書くことにし、用紙の分割の仕方について彼は自分で考えた案を複数並べ、皆にどれがいいかと尋ねるのだった。紙を回して皆に選ばせると、ふたつの案が同点になってしまった。そこでもう一度紙を回してようやく最終的にひとつの案が決められた。そのあと、Y

がスタイルとふたりだけになった時「大変だったね」と声をかけると、「皆、協力してくれない」と呟いた。

しかし、ファイヤーは協力的であった。彼はスタイルの横に座り、彼の話の頷きながら聞いている。他のメンバーは関係ない話をしたりぼんやりとしているのだが、ファイヤーはふざけて話をしているキャップの横にいて「どうする?」「何を描く?」などと話しかけている。キャップが相変わらずふざけているので、ムツとした表情になる。キャップはスタイルの話も聞かず、関係ない話をしたり、お菓子を食べながらどうしても「おおくぼんち」をタズラに書かせようとし、「書いてくれなきゃ自分も書かない」という。スタイルに向かって意味ありげに「魔の第3ポイントな」「ふたりだけしか知らない」などという。キャップがトイレに立った時、Yは「待っているからね」と伝え、帰ってきたところですぐに、絵を描くことに誘うと、キャップはのってきて「下書きをしたい」といい、紙を与えられると自分からモヤシの絵を描き始めた。「必死で取ったもんなあ」といいながら彼は描きはじめるが、しきりに「モヤシらしく見えない」と繰り返す。Yはその度に「いや、モヤシに見えるよ」と同じく繰り返していった。そしてB紙に書き始め、まずざるを、次に山なりになったモヤシを描いて

いく。Yが「迫力あるなあ」と感心すると「それ皮肉?」と聞く。あとは黙々と熱心に描きはじめ、その熱中した様子がYにも伝わってきた。大分描けたところで、Yがもう一度「迫力あるなあ」というと、「モヤシでも…」と自分自身を納得させるようにいう。タズラが本当に「おおくぼんち」を描くのかと尋ねると、キャップはこう描くんだとあって、手本をみせる。それから時々、タズラがちゃんと描けているかどうか気にして見ている。最後にモヤシの芽と芯をもった左右の手を描くのだが、消しゴムで何度も消しながら、「手らしくないなあ」と悔しそうにいう。そこでYが自分の手をさし出して見せると、それを見て描写し自分なりに納得したものが描けたようであった。まとめの表現が終わって、部屋から出ていくとき「早く帰りたい」「パソコンは集中攻撃をしない」と呟く。

でき上がった絵(写真1)について簡単に説明しておく。全体は大まかに4分割され、左上にはラッコによる高校生、ボランティアふたりの顔をその横にチーターによるウノのカードが描かれ、その周りを囲むようにファシリテーターの似顔絵がツバサによって描かれている。右上にはタズラによる、キャップの指示により書かされた皿にのった男根とその側に置かれたナイフとフォーク、

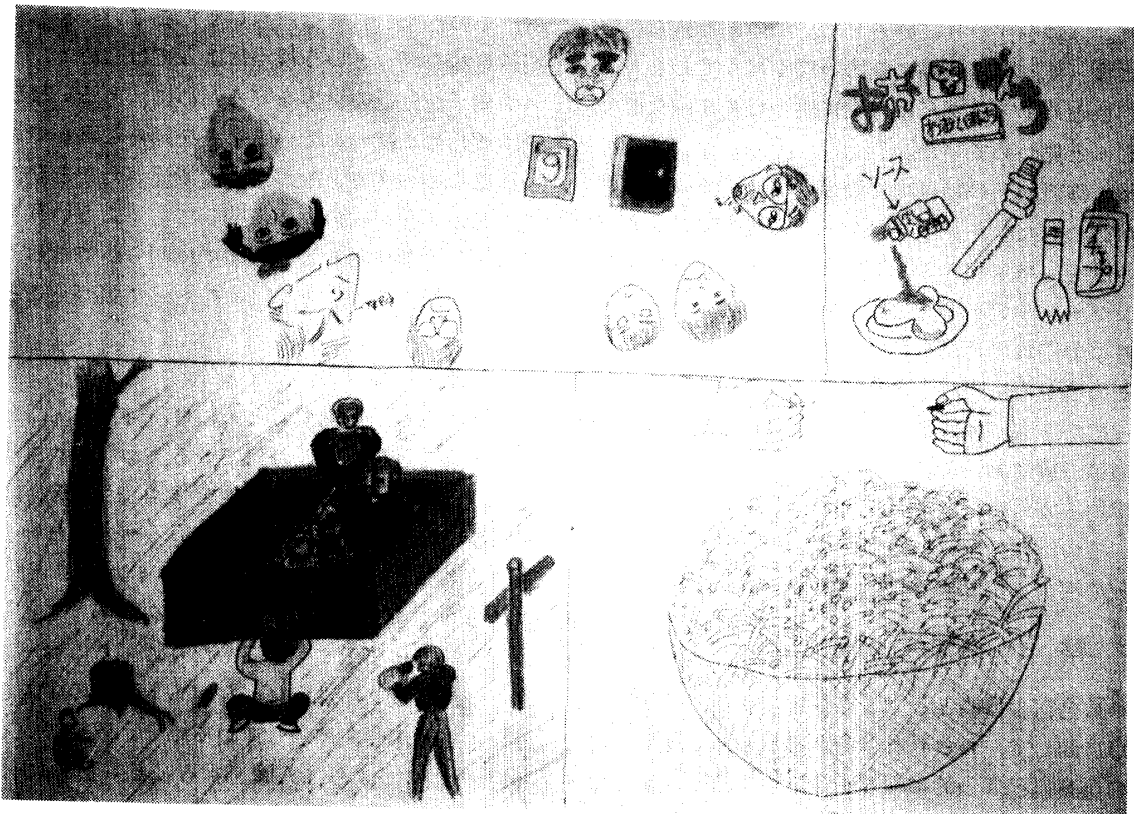


写真1

ケチャップとソースの絵がある。これは、性的成熟への対抗としての幼児性欲の再来ないしは退行という前青年期心性についてのブロス（Blos, P）的解釈を思い起こさせるが、キャップはこれを冗談やふざけを共有できる子分としてのタズラに託し、あくまでも冗談として上部に置くことで、その下に自分の本音の世界を表現することができた。モヤシのこだわりの世界である。残りの左下はスタイルとファイヤーによる野外調理場のシーンである。スタイルがまずクレパスの多彩色で炉の中に入って鍋で焼きソバを作っている場面を描き、ファイヤーはその中に火を燃やしている自分の姿を書き込んだ。それは構図上、後ろ向きにせざるをえなかったのが、その姿はなおまだ彼が後ろ向きの、匿名的なのか顔のない参加の仕方をしていることの表現のようにも思われた。こうしてみると、このまとめの表現は大変な難産の結果生まれたものであったが、そこにはやはり各メンバーの合宿中最大の思い出となる核心的体験が描かれていたことがわかる。

引き続き行われたまとめの表現の発表会では、キャップは作品の真正面の位置に陣取った。メンバーはそれぞれ順番に自分の描いたものの説明をし皆から盛大な拍手を浴びた。しかし、キャップは自分の番になっても席から立つことさえできず、もじもじしているだけで何もいえないのだった。Nがなぜモヤシなのかについて、ふたりの共同体験を代わりに発表した。このあと昼食に移ることになって、発表会場に誰もいなくなってしまうから、ひとりキャップだけは席に座ったまま、正面の作品をじっと見つめていた。

昼食後、体育館前の駐車場で最後のプログラム「お別れ会」が行われた。キャップはシートの代わりにしたダンボール紙を、傘を突きさし穴をあけている。皆で輪になって、ファシリテーター全員がすべてのメンバーひとりひとりにお別れの言葉をかけている時、キャップは傘を広げそのうしろに隠れるようにしていた。しかし、解散になってからも、名残惜しそうにもっとも最後まで留まったのは、彼であった。

合宿後約1カ月たってから「再会ミーティング」が行われた。この折りの記録にも興味深い点が多いが、ここでは紙数の都合で割愛することにしたい。

IV. 考察

はじめに合宿の目的として3点をあげたが、ここではその視点に即して、われわれ自身がどれくらいまで到達できたのかを自己評価的に検討することで考察をすすめることにしたい。その中でまた、メンバーの生徒が何を体験をしたのかが明らかにできればと思う。

1. 教師の成長

まず第1の目的としては「不登校生徒の集団に直接かわかることははじめてであり、この新たな体験をいかし、教師としての成長の機会としたい」ということがあった。この点についての多くのファシリテーターの自己評価を、非常に大雑把に5段階尺度でいえば、平均は4点であった。ファシリテーターの大半は学校教師なので、合宿におけるファシリテーター役割と学校における教師役割とを対比しながら、以下その具体的な内容について述べていきたい。

(1) 表に現れたもののそれ自体の意味を問うこと

学校現場では教師は生徒の取る行動に対して、前後の文脈からの因果関係で了解したり、また規則等の外枠や自らの内的な生徒観・教育観によって、その是非善悪を判断することが多い。すなわち、生徒は彼ら自身とはまったく別の外在的価値規準によって評価されているのが常である。しかし、今回の合宿体験を通してファシリテーターは、外側からの判断は極力控えて、メンバーの行動はそれ自体、つまり彼自身にとって、どのような意味があるのかという視点で接してきた。そしてこのような姿勢で彼らの理解に努めることが重要であることにあらためて深く気づくことができた。たとえば、スタイルのサングラスやキャップの帽子に対して、学校状況でのように礼儀、規則、常識といった観点からだけ見ていたのでは、その行動の意味は何も見えてこない。それ自体の内在的意味を問うという視点によってはじめて、サングラスや帽子が自己の世界を守るために、あるいは感情を抑制するために使われていることを知ることができる。これはほんの一例であるが、経過で述べたこと全体を通して、どのメンバーの動きに関しても、こういう視点で見ることが重要であることはすでに明らかであろう。ほとんどの教師はこのことを、身をもって気づくことができた。

(2) 共振的体験

生徒の行動を受容するためには、「待つ」ことが大切だということはいわれている。われわれも事前の勉強会で「待つ」ことの重要性を強調した。それはしかし、単に長い時間、受動的に控えているべきだということの意味しているのではない。「待つ」ということは、やがて起こってくるかもしれないことを期待してじっとしているだけではなくて、さしあたりこっちのペースに巻き込んだりはしないようにしながらも、その中でむしろ積極的に生徒が今、体験していること、感じていることに「共感」というより「共鳴」すること、ともに体験すること、ともに揺れることが重要なのである。つまり「待つ」ことの意義は、ファシリテーターとメンバーの間

に、あるいは教師と生徒の間に「一緒に体験すること」「共振的体験」が起こること、にあるのである。たとえば、火をおこそうとするがなかなかつかないでいる時のファイヤーとAとの間、強迫的にモヤシの芽と根を取っている時のキャップとNとの間、その体験を絵に描いている時のキャップとYとの間において、メンバーのこころの中で瞬間瞬間に、刻々と変化している「揺れ」（それが感情カテゴリーの用語で言語化されれば、嬉しいとか悲しいとかになるが、そのような言語化以前の何ともいえない感情的原体験）にもなって、ファシリテーターが「揺れる」ことなのである。このような体験や感情の共振が、あとで検討するようにいわゆる治療的意味をもたらしたと考えられる。

合宿では、山の中で長い時間があるという状況において、ファシリテーターとメンバーはこのような共振的体験を得ることができた。時間に追われる学校状況においては教師と生徒がこのような共体験を日常的に持つことは困難のように思われる。普段は、教師は単に時間的に待つということさえできないであろう。しかし、多少とも時間的に余裕をもって取り組むことのできる行事などの機会を通して、できるだけ教師はこのような姿勢で臨むことが期待される。

(3) 課題中心から対人関係中心へ

われわれは合宿の準備段階から、単にプログラムを消化するという意味での課題中心ではなく、メンバーの体験や相互作用という意味での対人関係中心の態度が重要であることを確認してきた。これは必ずしも意図したものではなかったのだが、ファシリテーターは結果的に主にプログラムの進行役や事務的役割を担う人と、一方でメンバーとともに体験をすることに専念する人のふたつのタイプに分かれていった。合宿という実践を遂行するためには、いわゆるPとMの両機能が必要であり、自然に役割分担されていったわけであるが、前者はプログラムの進行という現実的責任を担っているのでどうしても課題中心にならざるをえないが、後者はメンバーの中で対人関係中心の態度を持つことが可能であった。何らかの行事を行うときは、表面的には課題中心になるだろうが、ファシリテーターや教師は対人関係中心の態度を持っていないと、生徒やメンバーが他者とともにそこで何を体験しているのかが見えなくなってしまう。教師というものは、学校状況では極端に課題中心に流れやすく、そこで起きている生徒の体験や仲間との相互作用を見逃しやすいことに、改めて気づくことができた。

(4) セルフモニター

学校状況では、教師が自分自身の行動を振り返ることは少ない。自分が生徒に向けている態度や自分のかかわ

り方を見つめ直すような機会はそれほど多くはないのである。ファシリテーターのある教師は「キャッチボールにたとえば、学校状況では教師が投げたボールを生徒が受け取ったかどうか注意が向いていて、自分がどういうフォームでどういう球種を投げているのかを振りかえることが少ないことに気づいた」という。合宿ではファシリテーターとして常に、自分がどういう態度を取っていて、どういう風にかかわっているのか、自分は相手にどのように映っているのか、と自分自身の態度を反省することが要請された。多くのファシリテーターはそれが教師としての普段の自己の態度や価値観についての気づきになったと述べている。そしてそれは個への対応の重要性、個人の成長の大切さ、それを支援し自信にさせることの大事さという視点の確認にもなったという。

ところで、この「セルフモニター」を実行するのに際して、世阿弥の能学理論（源、1989）における「離見の見」が参考になる。これは「前を見る肉眼の見るものは“我見”であり、後に置かれた心の眼の見るものは“離見”である。そしてこの“離見”に映るものは、観客から見られた自己の舞姿である」というものであり、演技者である自分が能をやりながら、自分を見ることである。いいかえれば、見ることと見られることが一体化した見方、つまり主客矛盾的自己同一とでもいう構造を持つことである。同様の考えとして、神田橋（1984）のいう「空中に浮かぶ自分の眼球というイメージ」があげられる。「患者を目の前にしてその話に聴き入っている自分がある一方で、自分の中の意識の一部、主として観察する自己が、一種の離魂現象を起こして空中に舞いあがり、面接室の天井近く、自分の斜め上方から見おろしている、とイメージするのである」という。「関与しながらの観察」とはこのようなものでなければならないのであろう。

2. 本質的理解

ふたつめの目的としては「不登校生徒との直接のふれあいの中で、不登校の本質についての理解を深めることになろう」があった。この問題についてのわれわれ自身の評価は3点であった。今回の合宿では予めメンバーについての生育歴や家族環境等に関する情報がまったく得られないままにはじまってしまう、前もっての見通しがまるで立たず、そもそも彼らがどのような心理的課題をかかえているのかはまったく不明であった。この点やはり予備面接は不可欠である。しかし、はじめての出会いを通してでも、不登校の本質にかかわる問題はかなり実感されるものであった。われわれはすでに述べたように、不登校の本質をタテ関係からヨコ関係への発達の挫折、つまり仲間との相互的関係への参入の困難さか

らの退避として考えているが、合宿体験を通してそのことを本当に具体的にみることができた。そのようなヨコ関係の困難さは、合宿中随所にみられたのであるが、それを代表するような象徴的な出来事は、最終日のまとめの表現において観察された。B紙に表現された絵は、結局7人全体で共同制作することはできず、ようやく分割されたものの集合という形で何とかひとつになりえただけであった。この表現過程で観察されたのは、支配と従属、依存と逃避、孤立と委譲とであり、信頼と協力、協調と共闘といった水平的相互関係を形成することはなかなか困難であった。勿論、われわれはこのような合宿を実施したからといって、最初からすぐさまメンバー間にヨコ関係を形成しようと考えていたわけではない。実際、合宿を行ってみてあらためてその困難さを実感するとともに、不登校の本質的問題としてやはりこのヨコ関係への発達に根本にあることを思い知ったのだ。こうしてメンバー間で直ちにヨコ関係を形成することは困難ではあったけれども、このようなヨコ関係への発達、展開にとってはメンバーのファシリテーターとの関係が非常に重要な意味を持ったと考えられる。すなわちこのファシリテーターとの関係は、年齢的には明らかにタテ関係にあったけれども、共振的關係が成立したという点で本質的にはヨコ関係のうちにあったというのである。スタイルは「友達は刺激にならなかったが、いい先生たちに出会えたのが収穫だった」とあとで述べている。かつて不登校経験を持つボランティアの高校生は「ここにいる先生たちには夢がある。学校の先生たちがもしもこんな先生たちばかりだったら、決して自分は登校拒否にはならなかっただろう」ともいう。たしかにいきなり子ども同士でヨコ関係を形成することは容易なことではないであろう。ファシリテーターの大人がまず、子どもの位置に降りることにより、そこでの共通感覚的体験を通して世界への信頼を学ばせる必要がある。それが彼らが本質的にヨコ関係を体験するということである。実際、スタイルの母親もツバサの母親も異口同音に合宿後、子どもがそれまであんなに不信感に凝り固まっていた大人に対して、信頼感を持てるようになったと喜びをもって語っている。まず、われわれファシリテーターは全面的受容の姿勢により、メンバーとの間に本質的なヨコ関係を形成し、それをモデルとして次により本格的にメンバー間のヨコ関係が実現されるように動いていくことが重要な意味を持つのである。

はじめの意図通り、そもそもこういう合宿に参加すること自体が「不登校生徒は自分だけではない」「自分だけが特殊な存在なのではない」というヤロムのいう「普遍性」、つまり自分も人も同じ人間なのだという

Auchsein 感覚を体験する機会となったことだけは間違いない。

3. メンバーの体験について

3つめの目的は「いかにメンバーを変容させることができたか」であった。変容というには、合宿後、登校できるようになったというのがもっとも明らかな効果ではあるが、直ちにこのことを期待するのはあまりにも短絡的というものであろう。ならば、より内面的・心理的な変化に関して、敏感にその意味を感じとつていかなければならない。この点についての自己評価は4点である。ここでは4人の中学生の体験についてまとめておくことにしよう。

キャップはモヤシ体験に象徴されるように、基本的には他者からの愛情、受容、承認を切実に、むしろ強迫的にさえ、求めていた。自分が他者にどれくらい受け入れられ、愛され、必要とされているかということによって、人は自己存在の意味を確認することができる。自己確認のために、他者の受容を必要とするのである。ところが、この欲求があまりにも強すぎる場合、現実生活の中でそのような過度の欲求を出せば、結局のところは他者から拒否されざるをえない。このことを彼はすでにいやというほど体験している。このため彼は、この欲求を出すことをあきらめ、その代わりに賞罰という道具的・取引的なかかわりや、頻繁に飛ばすギャグやふざけ、ゲーム機への逃げ等々によって、徹底的に表層的に振る舞おうとする。しかし、キャップのモヤシ体験は、いつになく本音で他者の関心、愛情を強迫的に確認するための作業になった。Nはキャップのこだわりの底にあるこのような意味の重さをほとんど本能的に嗅ぎ取り、彼にとことん付き合ったのであった。それはキャップにとっては決して現実生活では得られない体験であり、しかしこれこそ彼が真に求めてやまない体験なのであった。だからこそ、彼は最終日のまとめの表現において再びそれを振りかえり、その体験を自己のなかで永続的、恒常的なものにするための内在化の作業を行っていたのである。このような体験は、生活をともにするという状況が前提となつてはじめて可能となりえたものであるが、それは本質的には継続的な個人的心理療法の中で治療者がじっくり徹底して付き合うことによって得られるような体験である。合宿において一時的とはいえ、このような体験を通して彼はより現実適応的に本来の欲求を出す仕方を知ったのであったが、それが彼の中で本格的なものになっていくためには、今後、継続的な心理療法を必要としているであろう。

ファイヤーは体が大きく活動的でよくしゃべるので、十分ひとりでやっていけるように見える。しかし、火が

なかなか着かなかった時、「教えてよ」「できなからやってよ」ということも当然できたのに、彼は決してそうしようとはしなかった。うまく甘えられないのである。そうかと思うと他方、買物やまとめの表現ではスタイルに任せ、完全に頼ってしまう。自分よりも能力があると思われる人、たとえばスタイルの前では、過度に依存的になってしまい、対等に自己主張できなくなってしまう。もしかすると、彼は権威的で強い父親イメージを抱いているのではないだろうか。つまり、そういう大人ないしは権威の前では萎縮し固くなるか、依存的に自己委譲するかのどちらかになってしまう。しかし、彼は実はそれを乗り越えたいと思っており、スタイルとの競争に敏感になってしまった。ウォーク・ラリーではスタイルをライバルとして意識し最初からやる気持を示していたし、また何としても最後までやりぬきたいという意欲を見せたのだった。彼は自己への高い要求水準を持ち、それに見合う理想自己像を有していることがわかるが、このことがまた登校拒否になったことともおそらく関連していると思われる。他の様々な場面でわれわれが敗けてやることにより、競争に勝つ自信を身に着けうる体験をさせる必要があったかもしれない。

ツバサは大人しくあまり目立たなかったが、買物の時には自発的に暗算で計算をしたり、就寝時間になって一旦横になってからもまた起きてきて、皆の仲間に加わり、ウノのゲームやカメムシの話を楽しんでいた。お別れ会の時には「知らない人ばかりで不安だったけど、皆が積極的に話しかけてくれて嬉しかった。夏休みにまたこういう合宿があれば参加したい」と語った。ファシリテーターともよく付き合えた。まとめの表現でもファシリテーターの顔を描いている。彼は教師とのトラブルから不登校になったとのことであるが、この合宿を通して彼はその大人に接する体験を積み、安心感と信頼感が持てるようになった。合宿のあと、新学期は始業式には行けたが、あとはまた行けなくなっているとのことである。しかし、親の会の活動に参加し会場設定の手伝いなどを積極的にするようになったという。再会ミーティングでの表情も和らいで、楽しそうに生き生きとしていた。あるファシリテーターは「これはもうすぐ確実に学校に行けるという感じがする」と述べている。

スタイルははじめポーズをつくり、距離を保っていた。ひとたび課題が与えられれば、サッと自分だけで器用にやってのける。見られる自分を意識して格好よく振る舞っていた。しかし、買物で値切りの交渉をしたあたりが転機になり、そのあとの食事作りでは炉の中に入り込んで、まさになりふりかまわずヤキソバを作りはじめたのだった。これは彼にとっては珍しいがむしゃらな没

我的体験であった。これにはその直前の同じグループでのファイヤーの火おし場面での緊張が影響していたと思われる。彼は常に知的な処理で対応するタイプであり、感情は抑え込まれている。能面のような表情になることさえあった。そういう感情の抑圧がうまくいきにくくなると、彼はサングラスをかける。ウォーク・ラリーは最後までやりとげたかったが、相手のせいで途中で棄権することになり、後でサングラスをかけていた。ところが最後の日のまとめの表現では、彼は内心怒りをもってイラついていたのだが、ここではもはや彼はサングラスをかけなかった。粘り強くじっと留まり、全体を纏めようとよく努力した。何度も何度も皆の意見を聞いて、それを尊重しようとし、前日までのようにひとりでさっさとやってしまうようなことはなかった。これはまさしくわれわれファシリテーターが、メンバーに対して取っていた態度であった。それがモデルになりえたのであろう。さきにも述べたように彼は「友達には刺激されなかったけど、いい先生たちと出会ったのが収穫だった」と語っている。彼もまたファシリテーターとの間に通じ合う体験を持つことができた。合宿後、彼は以前よりはより多く登校できるようになった。母親は「以前は大人への不信感が強かったが、最近は大人を信頼してもいいという態度になってきている」と述べている。

総じて、この合宿という特殊な状況の中で、彼らは普通では得られない新しい体験をしたとはいえるであろう。それは「世界への信頼」の萌芽となるものといえてよいのではないだろうか。

V. まとめ

われわれは登校拒否児の治療教育のために、合宿を実施した。かねてよりわれわれは登校拒否の本質を「共通感覚形成不全により、青年期におけるタテ関係からヨコ関係への展開という課題に関して挫折し退避した状態」として捉えているが、この合宿はその本質理解に基づく具体的処遇の試みであった。合宿には7名の生徒が参加し、これに16名のファシリテーターがかかわった。本論ではその経過を現象学的に記述し、結果について検討し考察した。われわれの視点からして、この試みは彼らの内面的成長にとって有効であったことが示され、今後この種の試みに寄与しうる基礎的諸知見が構築された。

文 献

秋山剛訳 1986 グループリーダーのあり方 —続・ウォン教授の集団精神療法セミナー— 日本集団精神療法

登校拒否に関する研究 (第V報)

- 学会 星和書店
- Bion, W. R. 1952 Group dynamics : A re-view. International Journal of Psychoanalysis, 33, 235-247
- 池田博和・桐山雅子・平石賢二ほか 1988 登校拒否に関する研究 (第II報) 「タテ関係からヨコ関係への発達における挫折」としての登校拒否 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科) 35, 163-178
- 池田由子 1975 集団精神療法 精神医学大系17 中山書店
- 神田橋條治 1984 精神科診断面接のコツ 岩崎学術出版社
- 黒田健次 1973 登校拒否児の治療訓練キャンプ 児童精神医学とその近接領域 14, 55-74
- 源了圓 1989 型 創文社
- 山口隆・増野肇・中川賢幸編 1987 やさしい集団精神療法入門 星和書店
- 山口隆・松原太郎監修 1985 ウォン教授の集団精神療法セミナー -グループ療法の始め方と続け方 日本集団精神療法学会 星和書店
- Yalom, I. D. 1975 The Theory and Practice of Group Psychotherapy. Basic Books, New York. (1991年8月31日 受稿)

ABSTRACT

A Study on School Refusal (V)

--- School refusal pupils' experience in a camp ---

Hirokazu IKEDA, and Kenji YOSHII

We planned and practiced the camp of four days and three nights for the purpose of remedial education for the school refusal pupils.

We have already considered that the basic disturbance of school refusal is a state of breakdown and withdrawal from the psychological task of development from vertical relationship to horizontal one in the stage of adolescence, which is due to insufficient formation of 'common sense.' This camp was the trial of concrete treatment on the basis of this comprehension what is essence of school refusal problem.

7 pupils and 16 facilitators participated in this camp. We phenomenologically described the process in detail, investigated the group dynamics or those psychological meanings, and considered the results of their internal change by new experience of living together in this paper. It was suggested that in the point of our view the trial of camp was effective in their inner growth by facilitator's psychotherapeutical and grouptherapeutical approach one by one. And we obtained many basic findings which contribute to this kind of camp to come into force hereafter.